

歳

左払いの終筆を強く突き止めよう。右払いはしっかりと細くならないように八分を入れて左右のバランスをとるようにしよう。

一

起筆で点を打ち、横画に入り八分をつけて下さい。

禱

偏は右上がりに書き、旁の寿は画数が多いので横画の間をつめて、文字が大きくならないようにしましょう。

而

一面目横画は、点をうち右へ運筆し八分をしっかりと入れ、下は大きくならないようにバランス良く書くようにしましょう。

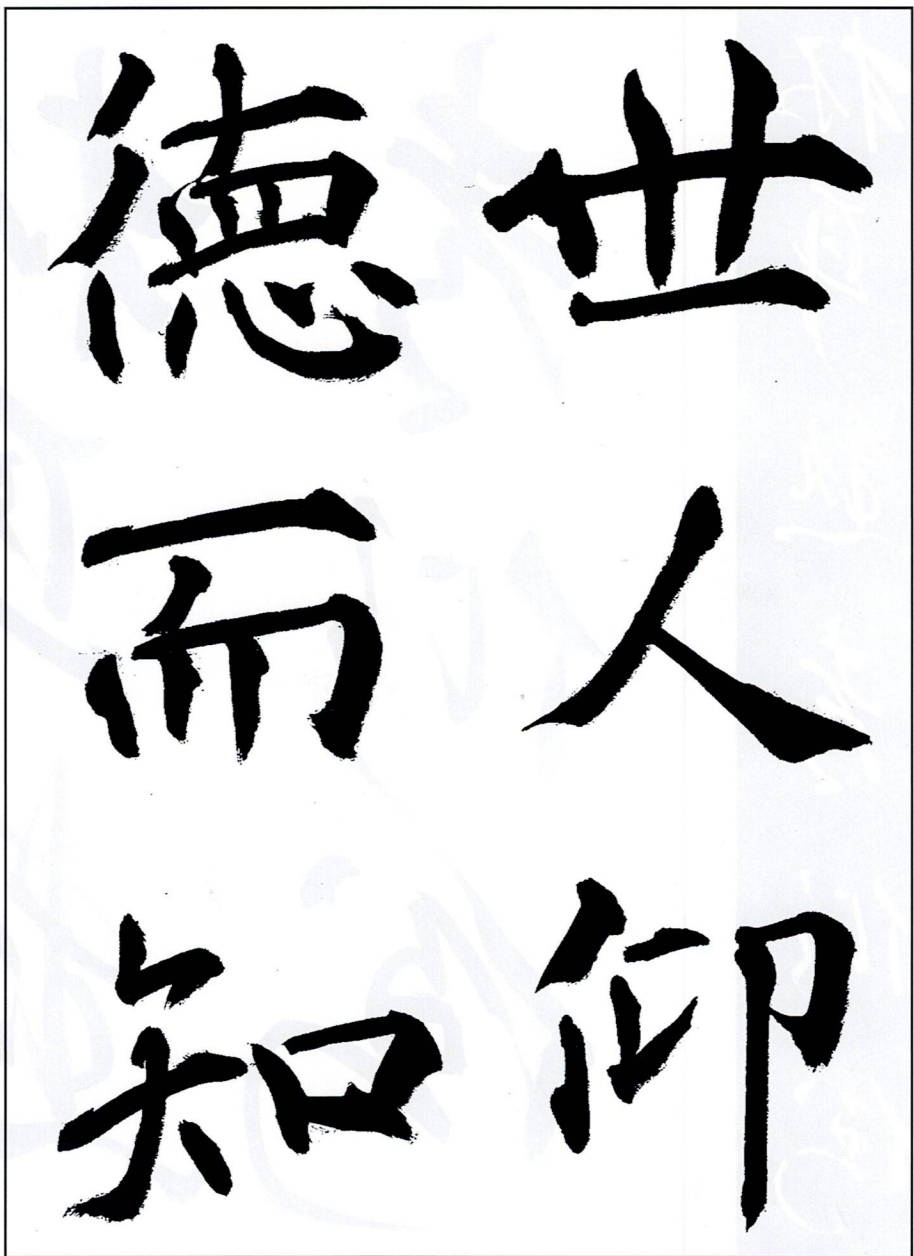
三

三画目の横画は、点をうち横へ、中程筆を浮かせて細く、原本は線が切れて見えますが切らないように書きましょう。

祠

三文字目と同じく、偏は右上がりに旁は右下がりに見えるようにバランス良く書きましょう。

今回は、一行目の一と二行目の三をどの様に並べるかがポイントと思います。起筆は、蔵鋒で書くような筆使いを。



世 第一筆の起筆は、露鋒で軽く止め、進むにつれ力を加え、筆圧の強いままぐつと押さえる。

人 始筆は、少し止めゆつくりと払う。右の払いには、思いきって書いて下さい。

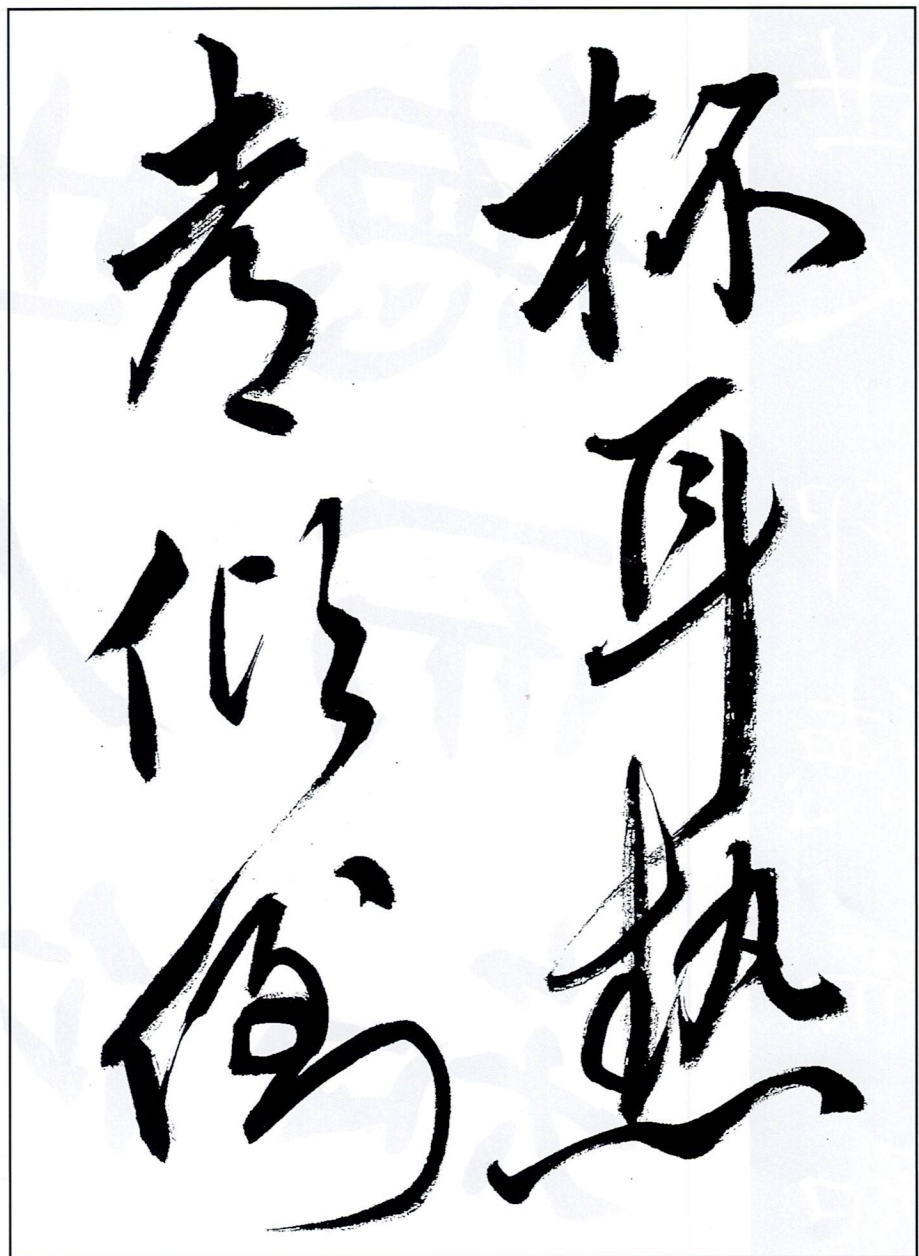
仰 偏の二画目、下軽く止め、もどすような形で。旁の右側の「冫」は伸びやかに、腕ごと鋭く引きぬくように。

徳 旁の横画は長く。最終の「心」は余白をしっかりと取る。

而 第一画露鋒で入り、横画長く、収筆は筆圧の強いまま、太めに押さえています。

知 偏の左への払い、折れる様に少し左に出して書いて下さい。

小田原翠浦書



杯

扁から旁へ、筆先受けて入り、
隣の細い線は、筆管よく立っています。

耳

流れるように、次の字へ。

熱

最後まで、ゆっくり、一息に。

都

始筆、三角目、筆先を考えて力強く。

傾

白い部分 生きています。

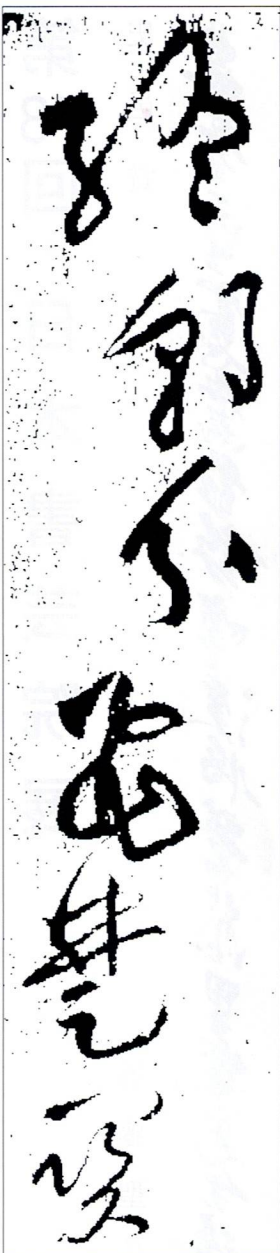
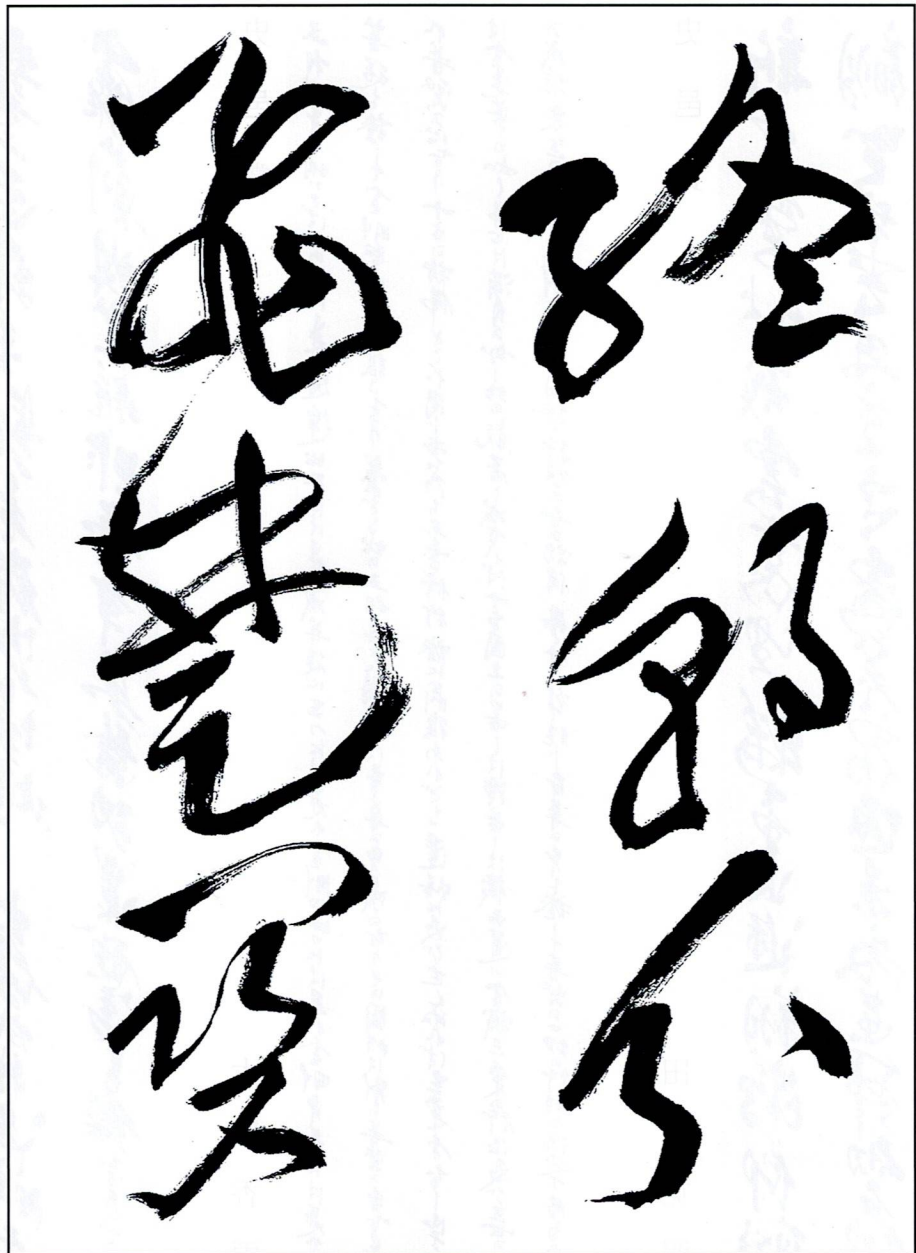
倒

上から流れるように 大きく腕を動かして
ゆっくり最後の点へ運びます。

青山杉雨先生、六十三才の時、董其昌と出会われ、
それ以後『画禅室随筆』を耽読される。その翌年
第二十五則を作品にされました。ご紹介します。

『杉雨の眼と書』より

陽星度其月類而君懷其日草之區其奇法
 二十七年冬三國之師宗之煙黃其天皆深之書証也
 既而十年一須進臨臨其度之留十
 董其昌心其珠金隨筆行其作一節也也



行の中心線の移動、扁と傍のアンバランスな字形、空間の呼び込み、と動き等に留意して

(朝を終えず、分かれ飛んで 楚關)

終

偏と傍の間の取り方、空間に留意して横広く。

朝

扁と傍の高低差 アンバランスの妙で動きのある字形。

分

一画、思いっきり左斜線。最終画の位置に留意して、空間を取りバランスを保つ。

飛

一画目消筆が見られるが 全体流れる如くスピード感をもって一気に仕上げる。

楚

上字からの繋ぎを受けて、全体右上がりの不安定な字形、下部終筆、これも右上がりの広がり、空間を呼び込む。

關

一画目消筆見られるが、全体に右上がりの軽やかな、動きのある線質。終筆は右下がりにて安定を保つ。